

二〇二六年度 洛星中学校入学試験 (国語) 【後期日程】

※ 問題は冊子形式で、全部で30ページあります。

※ 解答用紙は問題冊子の中にはさんであります。

※ 解答は欄らんをはみ出して書いてはいけません。

【一】 次の文章は、『苦手から始める作文教室 文章が書けたらいいことはある?』（津村 記久子^{つむら きくこ} 作）の一部です。よく読んで後の問いに答えなさい。

実感が大切

わたしが誰かの作文を読んで、「伝わってくるなあ」と思えるのは、①実感が書かれていることです。実感がどういうものかは説明しにくいのですが、こちらが読む側だと「本当のことが書いてあるよな」と感じられることです。わたしのタイプライターの内蔵の辞書では、実感とは「現実の物事に接することで得られる感じ。現実の物事に接しているかのような感じ。また、そのように感じる」と説明されています。

5

「現実の物事に接することで得られる感じ」と言い切ってしまうと、ゲームやマンガや映画のことは書けないので、この「現実の物事」は、作文の中で取り上げる物事ではなく、実際に存在する「書き手自身の心」ということにしましょう。「書き手自身の心に接しているような感じ」が書かれている状態とはつまり、書き手自身の感じたままのことが書かれている感じですよ。ようするに、書き手がうそをついていない状態です。書き手が本当に感じていることが書かれている状態です。

自分が誰かの文章を読んで、「この人は本当にこう感じているんだな」と思えた場合、そういう文章はだいたいおもしろいです。多少文の組み立てがぶかっこうでも、それでもやつぱりおもしろいです。本当のことを書いているぶかっこうな文の反対は、Xということになります。わたし自身の主観だけで言う、それはつまらない文章です。

10

本当のことを書くほうが簡単なのに、わざわざうそをつくなんて、と思う人もいるかもしれません。わたしもそう思います。が、作文でもSNSでもいいんですけど、誰かに自分についての文を見せる時に、ついつい②見栄を張ってしまう人っていますよね。文を通して「自分を大きく見せたい人」「自分を良く見られたい人」が、そういうことをやるわけです。誰だって自分を大きく見せたいですし、良いように見られたいよな、と考えると、「わざわざうそをつく」ことはそんなに理解できないこと、難しいことでもないように思えてきます。

15

そういう人はべつにそうしたらいいと思うんですが、ただ③わたし自身は「つまらない」と思います。伝わってこない文章です。伝わる文章を書くためには、文章を使って自分を大きく見せようとすることをまずやめると良いかもしれません。

せつかく見栄を張れる機会なのに、自分を大きく見せようとしないうことは、④居心地いしちが良いでしょうか？ 悪いでしょうか？ わたし自身の体験しかお伝えすることはできないのですが、本当のことを書いて誰かが気に入ってくれたり、悪くないと思われることは、決して居心地の悪いことではありません。この本の文章を通して、わたしがどれだけしょぼい生活をしている人間であるかについてはいいかげん伝わっていると思うのですが、「この人はこんなにしょぼりした生活をしているのに一応生きているのだから、自分もあんまりいいことはないけどまあがんばろう」などと思っただけとしたら、わたしはともうれしく感じます。

本当であることが光って見える

ずっと文章を書いてきて気付いたことの一つに、自分自身のしょうもないありのままの出来事を文章に書いてみると、そのしょうもないありのままの出来事が、i 捨てたものではないなと思えてくることです。意味がある、と言い切ってしまうのとはちよつと違います。が、「しょうもないのもそれほど悪くないな」という感じです。

ii わたしは、先ほどデスクの近くに持つてきてコップに注いだはずのスポーツドリンクの1・5リットルのペットボトルを、だいたい5分ぐらいの間で見失ってしまい、デスクの周りをさんざん探し回ったあげく、あんなでかいものをなくすって自分のだらしなさって何なんだ……、とちよつと絶望していたのですが、自分は意外ときっちりしていて、トイレに行くついでに無意識に台所にペットボトルを戻しもどに行っていたということが判明しました。出来事としてはただのいらいらする話ですが、整理するとまぬけに思えてきます。自分に起こる出来事を文章にして⑤「まぬけ」化することは、いらいらする日常をそれほど悪くないものにする一つの方法だとわたしはまじめに思っています。

わたしの話だけだと貧弱ひんじやくですし、⑥ありのままの出来事をおもしろく書いている文章は世の中にたくさんあるので、Y 的に好きなものを紹介しょうかいします。

一つ目は、20世紀前半のイギリスの作家ジョージ・オーウェルという人が『パブと大衆』という本について書いた感想の中にあつた文章です。ある女性が、自分のお祖母さんがすごくビールが好きだったということについて語っています。

40

あたしは、昔、お祖母さんが夜ビールを飲んでゐるのを見てると、楽しかったのよ。とても美味しそうだったわ。おつまみは、干からびたパンにチーズをのっただけだったのに、それがご馳走みたいに見えてね。ビールを飲んでりや百まで生きられるってお祖母さんは言ってたわ。九十二で死んだけど。

ジョージ・オーウェル著 小野寺健訳 「ビールを飲む理由 世論調査所編 『パブと大衆』 書評」

45

『一杯のおいしい紅茶』（中公文庫）所収より

ビールを飲めなくても、好きでなくても、このお祖母さんとお孫さんのしみじみと楽しい様子が浮かんできて、すぐに干からびたパンとチーズをくれ！という気分になる文章ですね。

二つ目は、シモーヌ・ヴェイユという、やはり20世紀前半のフランスの哲学者が、先生の仕事を休んで8か月間工場で働いていた時のことを細かく記した日記の中の文章です。彼女はわりと不器用な人のようで、あまり工場での仕事には向いていない様子です。

iii

この時は好きでない人と働いています。

50

わたしははやくやろうとばかりつとめた。〈中略〉スピードを調節するのはむづかしい。一々数えたりしてられないからだ。疲れる、とくに一時四五分にそとに出たときは、ぐったりだった（「ブリジュニク」で食事、くつろぐ。工場へもどるまでの、しばらくの楽しい時間（後略））。

55

（五時半に）元気はつらつと帰宅。一晚中いろんな考えで、頭の中はいっぱいだった〈中略〉。「ブリジュニク」で食事したことが、夕方こんなふうに気持ちよくしていただけるのに何程かあずかっているのだろうか。

シモーヌ・ヴェイユ著 田辺保訳『工場日記』（ちくま学芸文庫）より

「ブリジュニク」とは、均一価格の商品を売る大衆的なデパートのことだそうです。ばかみたいなんですが、これを読むと、いやな仕事をしている時や疲^{つか}れている時ほど、好きなところでごはんを食べようという気持ちになりますよね。

iv まったく自分を大きく見せようというところのない、まるでかざりのない文章ですが、本当のことがとても伝わってくる文章だとわたしは思います。

見栄を張れることも文章のよいところではありますが、文章を書くことは、さえない「本当のこと」「普通^{ふつう}のこと」をみがいて光らせることも可能にします。さえない「本当のこと」「普通のこと」が光って見えるということは、「本当のこと」「普通のこと」であっても「それでいいんだ」と思えることでもあります。わたしは文章を書くことを通して、⑦「普通のこと」も本^{ほん}当^{とう}であればそれほど悪くないんだと思えるようになりました。

問一 本文2行目に傍線部①「実感が書かれている」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. 書き手が実際に感じたことが、つたなくともそのまま文章として書かれていること。

イ. ゲームのような創作作品と同じく、書き手自身の体験を通じて思ったことが書かれていること。

ウ. 書き手の過去の経験が題材とされ、読み手自身も経験できるものとして書かれていること。

エ. 引用されている辞書の説明とは異なり、読む側に伝えたい書き手の感覚が書かれていること。

問二 本文中の空欄 (12行目)・ (37行目) に当てはまる言葉として最も適当なものをそれぞれア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 本当のことをふまえたつまらない文
- イ. うそを書いているきれいな文
- ウ. 本当のことをふまえた美しい文
- エ. うそを書いている正しくない文

- ア. 個人
- イ. 絶対
- ウ. 客観
- エ. 一般

問三

本文14行目に傍線部②「見栄を張ってしまう人」とありますが、この箇所での「見栄を張る」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 自分の思いを取りつくりつて文章にすること。
- イ. 自作の文章の見映えをことさらに気にすること。
- ウ. 自作の文章を利用して自分をよりよく見せること。
- エ. 他人よりも優れた文章を書く自信があること。

問四

本文18行目に傍線部③「わたし自身は『つまらない』と思います」とありますが、それはなぜだと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 文章の内容を飾り立てると、書き手の心が伝わらなくなり、読み手の共感や納得を得られないから。
- イ. 自分の体験を大きく見せると、読み手は面白がってくれるものの、自分自身に罪悪感が生まれるから。
- ウ. 本当のことを書いても、どうでもいい出来事が並ぶだけで、面白味おもしろみがなく文章にする意味がないから。
- エ. より整った文章に仕上がったとしても、読み手は違和感いわかんを覚えるだけで、書き手のうそがばれてしまうから。

問五

本文20行目に傍線部④「居心地が良いでしょうか？ 悪いでしょうか？」とありますが、この箇所の効果を説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 「？」を用いて疑問を二つ重ねることで、筆者がこの話題について答えをあえて出さず、読者と一緒いっしょに考えたいと思っっていることを伝えている。
- イ. 書き手の「居心地」を読者にたずねて読み手の視点から書き手の視点へ誘導ゆうどうすることで、二つの視点から話題を考えるきっかけをつくっている。
- ウ. 読者に問いかけてあらかじめ読者自身の経験を振り返らせることで、後に続く筆者自身の経験との違いちがいを具体的に感じさせようとしている。
- エ. 「居心地」という言葉にしにくい感覚に話題を移すことで、文章を書く際には書き手の感覚を言語化することが大切であると強調している。

問六

本文中の空欄 i (29行目) iv (62行目) に当てはまる言葉として最も適当なものをそれぞれア～エの中から選んで、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号は二度使いません。)

ア. たとえば

イ. しかも

ウ. どちらも

エ. でも

問七

本文35行目に傍線部⑤『まぬけ』化すること」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. 出来事としてまとめると他人には言えない照れくさい内容でも、出来事を順々に並べて書き連ねていくと、どこにでもありそうな出来事だとわかり、落ち着きを取り戻せるということ。

イ. 出来事としてまとめるとどうでもいい内容でも、自分のあるがままの思いを乗せて書き連ねていくうちに、他の人にも起こりうる失敗であることが、しみじみと伝わる文章になるということ。

ウ. 出来事としてまとめると一人よがりな内容でも、時間に沿ってきちんと整理してまとめて書き連ねていくと、自分の愚かさ^{おろこ}を他の人にも広めて、笑ってもらうきっかけとなるということ。

エ. 出来事としてまとめるとつまらなくて腹立たしくもある内容も、自分の思いとともに順序立てて書き連ねていくうちに、おかしさを含んだ^{ふく}、おだやかに受け止められる出来事へと変化するということ。

問八

本文 37 行目に傍線部⑥「ありのままの出来事をおもしろく書いている文章」とありますが、この後作者は二つの具体的な文章を紹介します。それぞれのどのような点を「おもしろい」と作者は感じているのでしょうか。その説明として最も適当なものをそれぞれア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

α

一つ目の文章

ア．干からびたパンやチーズといった、あえて粗末な食事風景が大げさに描き出されることで、苦しいながらも懐かしさを伴う日々の生活が浮き彫りになる点。

イ．干からびたパンやチーズといった、ビールに合う庶民的なおつまみが紹介されていることで、当時の時代背景や生活のスタイルが鮮やかに思い描けている点。

ウ．干からびたパンやチーズといった、暗く貧しい生活を象徴する食卓が表現されていることで、祖母の死を悲しむ素直な気持ち自然と立ち現れてくる点。

エ．干からびたパンやチーズといった、ありふれた日常の光景がそのときの感情とともに描かれていることで、祖母と孫との温かで楽しそうな情景が伝わってくる点。

ア. 手先が不器用で工場での仕事が合わない自分でも、好きな食事をとると元気になるという日常の出来事が文章になっていることで、時代を超えて、読み手もまた不器用ながらも気分転換になる何かを探せる点。

イ. 時間の経つのが遅いことへのいらだちや、自分には向かない工場での勤めに嫌気がさす絶望感が文章になっていることで、時代を超えて、読み手もまたくだらない仕事から逃れたいと思うことを受け止められる点。

ウ. 疲れや心地よさといった何気ない感情や、書き手を一時でも癒やしてくれたささやかな食事が文章になっていることで、時代を超えて、読み手もまた疲れたら自分好みの食事で心を穏やかにしたいと思える点。

エ. 工場での労働の苦しさや耐えながらも、ささやかな食事の喜びを通じた人生の考察が文章になっていることで、時代を超えて、読み手もまた日常の様子を小さな事からでも日記に書こうと思わせてくれる点。

問九

本文66行目に傍線部⑦『普通のこと』も本当であればそれほど悪くないんだと思えるようになりました」とありますが、なぜですか。考えられる理由として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア・ありきたりな出来事を書くときについて付け足しがちな飾り立てる言葉を除き、本当に起こったことだけを淡々と書くことで、読み手が書き手の偽りのない気持ちを追体験できるようになるということを、世界の文学を読みすすめる中で理解したから。

イ・他の人にも起こりうる出来事はたいして面白くないと思われがちだが、嘘をつかずに素直な気持ちで文章を書くことで、同時代の人だけでなく後世の人にもまで読み継がれる価値があると認められることを、過去の名作を何冊も読む中で実感したから。

ウ・日々の出来事は取り立てて他人に伝えるほどのものではないと思われるが、その時起こっていた感情・行動を一つずつ整理してゆくことで、他の人にもしみじみと伝わり、自分も前向きに捉えなおすことができるものになることを、文章を書く中で体感したから。

エ・その時はとるに足らないと思われた出来事の中にも、書き手がまだ自覚していなかった本当の気持ちがかくれていることはあるため、文章となつて後の人々に読んでもらうと書き手の本心と読み手の心がつながることがあると、長い作家人生の中で痛感したから。

【二】 次の問いに答えなさい。

問一 次の文(1)～(5)にある空欄に当てはまる漢字を一字で書きなさい。楷書体で丁寧^{かいいたい}に書くこと。

- (1) 言葉や文章の能力は、苦勉励^{くれいん}し続けることで上達するものだ。
- (2) 医療技術^{いりよう}が進展し、器移植の成功率も上がっている。
- (3) 先三寸でまがい物を売り付ける。
- (4) 世界を横無尽^{じん}に飛び回り活躍^{かつやく}したい。
- (5) 漢詩の基本は起転結だと学んだ。

問二 次の(1)～(5)について、傍線部にある慣用句の空欄に当てはまる語のうち、他と異なるものを探し、その漢字を書きなさい。楷書体で丁寧に書くこと。

- (1)
 - ・ 足がになるほど歩いた。
 - ・ はしにもにもかからない話だ。
 - ・ 歯に着せぬ言動で有名だ。
 - ・ やぶからに何を言い出すんだ。

(2)

二階から目[]をさすような真似^{まね}はやめろ。

手[]にかけて育てた梅の木だ。

良[]は口に苦いというが、本当にそうだ。

酒は百[]の長だというのは、言い訳だろう。

(3)

一寸の[]にも五分の魂^{たましい}があると思え。

思わず目が覚めたのは、[]の知らせなのだろうか。

たで食う[]も好き好きだろう。

小説の結末は言わぬが[]だろう。

(4)

[]は口ほどにものを言うものだよ。

壁^{かべ}に耳^{みみ}あり障子^{しょうじ}に[]あり、言動には十分気を付けよう。

ねこの[]ほどの庭でも、工夫すれば美しくなる。

親に[]を三角にして注意された。

(5)

[]つ子の魂百までで、大人になっても性格は変わらない。

難問でも、[]人寄れば文殊^{ぶんしゅ}の知恵^{ちえ}だ。チームで頑張^{がんば}ろう。

遭難^{そうなん}したが九死に[]生^{いき}をえて助かった。

早起きは[]文の徳だが、遅く起きるのは損でしかない。

【三】 次の文章は、『1992年の秋空』（辻村 深月^{つじむら みづき}作）の一部です。よく読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、一部文章を改変しています。

《登場人物の説明》

「私」（はるか）は小六、妹のうみかは小五。しかし二人は全く似ているところがない。学研の雑誌もはるかは恋愛が中心の、絵がきれいな漫画^{まんが}がつている『学習』を、うみかは観察や実験のできる付録がついている『科学』を購入^{こうにゆう}している。見た目もはるかとは切れ長の一重でバレーボールの邪魔^{じゃま}にならないように髪^{かみ}を短くしているのに対し、うみかは分厚い二重まぶたでとろんと眠^{ねむ}そうに見え、髪もたまにそろえるだけでそれ以上は切らせないからとても長い。

うちの妹は、あんまり人にどう見られるかを気にしないんだと思う。

そして、私はそういうあの子に、よくイライラさせられる。

去年の夏、家族で海に行った。

海岸沿いのホテルに泊^とまって、両親と私たち、家族四人で夜の浜辺^{はまべ}を散歩した。夕日のオレンジ色がだんだんと藍色^{あいいろ}に押^おされ、空が夜になっていく。遮^{さか}るもののない視界^{しがい}いっぱい海と空を見上げていると、いつの間にか、うみかが横に来ていた。

実を言うと、私は、うみかの名前が羨^{うらや}ましかった。

はるかとうみか。似てる名前だけど、一つだけで見た時に、はるかとは普通の名前^{ふつう}で、うみかの方が個性的でかわいい感じがした。うみかの名前の中には「海」がある。暗い夜の海とうみかは、よく似合ってる。

普段^{ふだん}から『科学』派で、宇宙に関する本だっていっぱい読んでる妹は、私より、今もずっとたくさんを考えて、感動しながら星空を眺^{なが}めているかもしれない。そう考えたら、④迂闊^{うがわ}に声をかけてはいけない気がした。①少し迷ってから、ようやく

「いいね」と話しかけた。

「きれいだね。私、絵を描^{えが}く時、月を黄色く塗^ぬってたけど、本当は白に近い金色なんだって、今、気づいた」

遠い場所に来たことで、ビー玉を散らしたようにきれいな夜空は、自分の家から見る空と違って『宇宙』なのだとはつきり思えた。波の音がしていた。

「空っていうと普通、昼間の水色の空を想像するけど、それって実は薄い膜みたいなもので、こっちの夜の色の空が地球を包んでる本当の空なんだって思えるね。不思議。暗いけど、怖くない。暖かい感じがする」

旅の興奮と、日中海で泳ぎ疲れたことと、何より家族と一緒にいるという気のゆるみが、いつになく暗闇を身近に感じさせてくれた。

うみかが「え？」と短く声を上げ、私を見た。聞き取れなかったのかもしれない。我ながら恥ずかしいセリフだったから、私は言い直さずに下を向いた。

砂浜には、作り物みたいにきれいな形をした貝殻がたくさん落ちていた。ザリガニのハサミのように表面がごつごつした巻き貝を手取る。耳に当て、そして「うわあ」と声を上げた。

「海の音がするよ、うみか」

ピンク色につやつや光った貝の内側から、水の底で聞くような遠い音が流れ込んできた。自分がとても贅沢なことをしている気分になる。だって、貝が沈んでいた海底では、こんなにはつきりと星は見えなかったはずだ。

「この貝、どのぐらい深いところに沈んでいたのかな。なんで、海の音がするんだろう。貝が記憶して一緒に持ってくるのかな。だとしたら、テープレコーダーみたい」

うみかにも聞かせたくて、貝を手渡す。貝を耳に当てたうみかは、私と同じようにしばらく音を聞いた後で、「お姉ちゃん」と呼びかけてきた。

「何？」

「貝の中から聞こえる音は、海の音じゃなくて、自分の耳の音なんだよ」

うみかはにこりともしていなかった。

「よく、貝殻から海の音が聞こえるっていうけど、それを出してるのはお姉ちゃん自身。保健室で、耳の断面図の写真見たことない？ 耳って、かたつむりの殻みたいな蝸牛って器官があるんだ。あの中、聞いた音を鼓膜から脳に伝える役割をする体液が入ってるんだけど、それ、波みたいに揺れて動くんだって。お姉ちゃんが聞いたのは、その、蝸牛の体液が動いて認識した音だよ。普段は小さくて聞こえないんだけど、貝殻にぶつかるとうみかに跳ね返って聞こえる。——だからこの音は海の音じゃないし、貝殻の記憶でもないよ」

浮かべていた笑みが強張って、表情が固まる。うみかが私を見て、「その音は——」と続けようとしたところで、頭の奥で真

つ 白い光が弾けた。

猛烈に腹が立った。無言でホテルの方に歩き出す。急に引き返した私を、うみかがびっくりしたように追いかけてくる。

「待ってよ。どうしたの、お姉ちゃん」

「知らない！」

実際、どう言えればいいのかわからなかった。

「あ、貝殻……」

うみかから「返すね、はい」と渡されても、②受け取る気がしなかった。

《中略部分》

毛利 衛さん（※1）が宇宙に行く特集の、本来買ってもらえない6年の『科学』を買ってもらうため、うみかは苦
手な逆上がりの練習をする。はるかにも一緒に手伝うことになり、一日目の練習ではあと少しのところまで回れた。次の
日の練習も約束したが、マンガ雑誌の発売日で、親友のミーナに誘われて家に行き、結局うみかとの約束を破ってしま
った。その日、一人で練習していたうみかは鉄棒から落ちてしまった。

「うみか、すぐに退院できるんでしょう？」

「ちよつと、長くかかるかもしれない」

帰りの車の中でお母さんに聞くと、少し間をおいて返事が返ってきた。

ちよつと、と、長く。

矛盾する二つの言葉を聞いて、嫌な予感がした。

「どうして？ ただの骨折なんでしょ」

「骨が育つ大事な時期の怪我だから、ちよつとね」

「心配しなくても大丈夫だよ、はるか」

運転席のお父さんも言う。だけど、二人の声は疲れて、元気がなかった。

結局、怪我についての⑧肝心なことを私に教えてくれたのは、うみか本人だった。

一学期の終業式を迎えて夏休みに入っても、うみかは退院できなかった。私は五年のうみかのクラスからもらったお見舞いの寄せ書きの色紙と「早くよくなつてね」と書かれた紙がぶらさがった千羽鶴を預かって、病室を訪ねた。

「骨が曲がった方向でくつついちゃってるから、手術しなきゃならないかもしれない」

うみかの口調は、いつもみたいに淡々としていた。私は「え」と呟いて、⑨咄嗟にうみかの腕を見てしまう。それからあわてて目をそらした。

「手術、するんだ？」

「うん。たぶん」

うみかが、クラスメートからもらった色紙のメッセージを目で読んでいる。一度ずつ読んだら、それでおしまいとばかりに、さつさと棚にしまう。蛍光ペンを駆使して、かわいい絵を入れてうみかにメッセージを綴ってる子たちとうみかが本当はそんなに仲良くないことを、私も知っていた。

「あのね、お姉ちゃん」

「うん」

「もし、骨折で、手術して、腕にボルトを入れたりすると、それがたとえ一個でも、もうそれだけで宇宙飛行士になれないんだって」

「え」

二度目の「え」は、大きな声になった。うみかが目を伏せ、何でもないふう窓の外を見る。だけど、私にはわかる。わざとだ。無理やり平気そうにしている。うみかはいつも、しっかり私の目を見て話す。

「痛いので、逃げ場がないんだよ」

言葉がかけられない私の前で、うみかが小さくため息をついた。

「何をしてれば気が紛れるっていうのがないから、宇宙に行ってるしかない」

「宇宙？」

「想像するの。自分が宇宙にいるとこ」

うみかはそう言って、ちよっとだけ笑った。海に穏やかな波が寄せてすぐになくなる時みたいな、静かな笑顔だった。

夏休みになって少しして、うみかは長かった髪を病院でばっさり、お母さんに切られてしまった。怪我のせいで思うようにお風呂に入ったり、髪を洗えなくなつて、長い髪をきれいなままにしておくのが難しくなつたのだ。ボサボサになっちゃうし、ちやうど暑い季節だし、いいじゃない、とお母さんは簡単なことのように言つたけど、お見舞いに行つた病室で、髪を短くされたうみかを見た時は、衝撃だつた。

「スースーする。変な感じ」

うみかは何でもないことのように言つてみせたけど、③この時も私の目を見ようとしなかった。

私の小六の夏休みは、ほぼ、うみかの怪我の思い出で埋まつた。うみか自身が感じてるように、あの子の怪我は私が思つていたよりずっと重傷だつた。両親が私が寝た後で、いつまでもリビングで話している声が聞こえて、私はそつと布団を出て、ドアに耳をくつつけて、声の内容を聞いていた。

——肘のところから切つて、神経を一つ一つくつつけ直す——という声を聞いた日、私は全身の血が一度に下がつていくのをはつきり感じた。

聞いてしまったことを後悔しながら布団に入ると、背筋が熱を出した時のようにぞくぞくした。

うみかが、手術する。

繋がっている自分の腕の付け根を見ながら、皮膚にメスが入ることを想像して、嫌だ、と叫びそうになつた。ダメだ、ダメだ、ダメだ、うみかの腕を切るなんてダメだ。

宇宙飛行士を目指せなくなるなんて、ダメだ！

眠れずにまた布団を出ると、二段ベッドの上から、うみかの机が見えた。並んだ『科学』のふろくたち。中にドーム型プラネタリウムの丸い頭が見えたら、気持ちが悪くならなくなつた。

南向きのカーテンの向こうから、月と星の明かりが差し込んで、部屋の中は窓辺だけが明るかつた。ベッドを降りて窓を開くと、夜の蟬が鳴いていた。晴れた空に浮かぶ星の名前。学校で習つたけど、私は北極星と、北斗七星くらいしかわからない。

宇宙飛行士になるには、勉強ができることはもちろん、身体が丈夫なことだって必要だろう。どうしよう。あの子は本気だ。あんなふうに恥ずかしそうに夢を打ち明けるくらい、大事に思つてる。エンデバーの打ち上げを、楽しみにしてる。

私はあの子のために何ができるだろう。

うみかに話を聞いてから、図書館で片っ端から宇宙飛行士に関する本を探して読んだ。手術したらダメなのか、目指すにはどんなことが必要なのか——、字がずらつと並んだ大人向けの分厚い本も開いてみた。

怪我は私のせいだ。どうしよう、どうしよう、と一生懸命内容を讀んだけど、私にちゃんとした答えをくれる本は一冊もなかった。両親や先生に聞くことも考えたけど、宇宙飛行士の夢のことはナイショにするって、うみかと約束していた。

④ 闇が、この時も少しも怖くなかった。去年の夏、うみかと歩いた浜辺の空も、こんなふうに暖かい光に満ちていた。思い出したら胸が詰まって、あの時、ケンカしたことすら縋りつきたいほど懐かしかった。

海岸で、貝殻の音のことで私はうみかに怒ってた。あの子が「その音は——」と続けようとしたのを遮って、勝手に歩き出した。

だけど、あの時、あの子はなんて言いたかったんだろう。私が何で怒ってるのかもわからないあの子に、私は一度だって怒ってる理由を自分から説明したことがない。口答えをするうみかに、私はいつだってそこで話すのをやめてた。あの子が話すことはどうせ生意気でかわいくないって決めつけて、まともに聞かなかった。

病院で聞いたうみかの言葉を思い出す。

——宇宙に行ってるしかない。

痛みには逃げ場がない、と話していた。何をしてても。気が紛れないって。

——想像するの。自分が宇宙にいるところ。

そう笑ってた。

ああ。

⑤ わかったよ、うみか、と心の中で呼びかける。

月がとても近い。私が見てるこの空の向こうにあるものを、うみかだったらもつとたくさん想像できるんだろう。あの子になら、見えるのだろう。

うみかはたぶん、宇宙にいるのだ。

嫌なことがあった時、いつも大好きな宇宙のことを思い出して、きつと耐えている。だから平気なんだ。クラスでひとりぼっちの時も、ピアニカ（※2）が一人だけない時も、逆上がりで残された時も、お気に入りだった長い髪を切られた時も。つらくなかったわけがない。だからきつと、自分の居場所を別に作った。狭い教室や目に見える場所だけをすべてにしなかった。だから

らあんなに強いのだ。

彼方^{かなた}にある星々の明かりを見上げながら、私は自分に何ができるかを、必死に、考え続けた。

学級だよりの清書用方眼紙^{ほうがんし}を前に、「何でも好きに書いていいですか」と尋ねると、湯上先生は「へ？」と声を上げた。私が笑わず、じっと見ているのに気づいて、表情を改める、そして、「いいよ」と答えてくれた。

「一学期からみんなそうしてるじゃないか。自分の興味があることを書きなさい」

「わかりました」

ミーナと一緒に職員室を後にする。

これまでみんなが『銀河』に書いた記事は「球技大会のメンバー発表」とか「遠足がありました」とか、そういうこと。行事がある時はいけど、そうじゃない時は「係の紹介^{しょうかい}」とか「授業がここまで進んでいます」とか、さらに味気ない記事になる。だけど、それでも悪目立ちするよりはずっといい。私は、自分もそういうものを書こうと思つてた。――二学期の、実際の今日になるまでは。

「はるか、何書くの？ 興味があることつて何？」

「ちよつと、気になることがあつて」

言つてしまつてから、思わせぶりな言い方になつたんじゃないかとあわてて否定する。

「ごめん。恥ずかしいから、ミーナにも後で見せるね」

「そうなの？」

案の定、ミーナがつまらなそうに唇^{くちびる}を尖らせた。

うみかの入院は結局、夏休みいっぱいしかかった。

だけど、エンデバーの打ち上げにはどうにか間に合つて、私たちはうちのテレビで、スペースシャトルの下から噴き出す炎^{ほのお}と空に向かつて消えていく影の中継映像を見た。毛利さんはこれから一週間ぐらい宇宙にいることになるそうだ。

誰より興奮しているだろうに、うみかはシャトル打ち上げの間、ほとんど喋らず、ただ食い入るようにして画面を見つめていた。録画した映像を何度も何度も再生して、毎日ニュースでエンデバーのことが報道されるたび、熱心に見入る。ギプスをしていない方の左手が、ぎゅつと、拳^{こぶし}を握つて、震えるのが見えた。

あ、泣くのかな、と思って顔を見ると、うみかの表情が、これまで見たこともないくらい嬉しそうに輝いていた。人間は、別に笑顔じゃなくてもこんなふうに嬉しさを表現できるんだって初めて知って、私にも、妹の喜びと興奮がそのまま伝染してしまふ。なぜか、私が泣きそうになった。

お母さんが許可してくれた『6年の科学』を、うみかは自分の『5年』のと合わせて熟読して、私にも『科学』や他の本、新聞で知ったというたくさんのことを教えてくれた。

アポロ計画から、今回のエンデバー号の打ち上げまでの歴史。毛利さんが宇宙で何をするのか。宇宙と地球、エンデバーの中と日本の小学校をテレビの生中継で繋ぎ、毛利さんが私たち子供に向けて宇宙から授業をしてくれるらしいと聞いて、うみかだけじゃなくて私もわくわくする。

一九八六年のチャレンジャー号の事故を受けて、今回の計画が遅れたことも、その時、うみかから教えてもらった。知らないうちに唇をきゅつと噛んでいた。これまで興味がなかったから、そんな歴史があったことだって私は知らなかった。

机の前で、私は深呼吸して、方眼紙に『銀河』の見出しと、最初の一行を書き始める。

『現在宇宙に行っているスペースシャトル「エンデバー」は、「努力」という意味です。』

学校に関係ないことを書くには、浮く人間の仲間入りかもしれない。だけど、私たちには教室の「ここ」がすべてじゃなくともいいんじゃないだろうか。教室の机の前に座っても、それと並行して気持ちももっと遠い宇宙を向いていることだってある。ただ文章を書いているだけなのに、途中、何度も息が切れた。自分がすごく恥ずかしいことをしようとしているんじゃないか、あるいは、真面目ないい子に見えることをしてるんじゃないか、それをみんなに見せようとしているんじゃないかと考えたら、不安でおなかの底から喉までを、わっと満たす。

⑥でも、私は、これをうみかに読んで欲しい。あの子に教えてもらったことが、刷られてみんなに配られて、学校にも認められるものになったんだってことを、見せたかった。

清書用のペンを持ち直す。用意した修正液は、ほとんど使わずに済んだ。一気に書き上げる。文章を書くのが楽しいなんて、初めて感じた。

完成した『銀河』の原稿を、両手で掴む。見出しを見つめ直す。

『毛利衛さん、宇宙へ』

『無事にミッションを終えて帰ってきてくれることを祈っている。』と書いた最後の言葉は、書いた後から頬がかーっとなる

くらいで、かつこつけすぎたかもしれないと反省したけど、結局、そのまま残した。それはたぶん、うみかと、そして私の一番の気持ちだったから。

《中略部分》

ドキドキしながら書き上げた『銀河』だったが、みんなあっさりと折ってしまいこんでしまう。気張っていた自分がバカみたいで、ひようしぬけたが、それ以上にみんなの反応が悪くて悔しかった。一方うみかはじつとのぞき込んで読んでいたが、無表情でいつも通りの反応だった。うみかの腕の状態は、当初考えていたよりかなりよく、十月にギプスがとれた。

五、六年合同でペアになってやるストレッチを、私は自分から「うみかとやりたい」と申し出た。怪我のことを知ってるみんなが、怖々とうみかの身体に触れることを考えたなら、私がやるのがきつと一番いい。姉妹でやるなんて気まずいと思つてた気持ちは、今は不思議と消えていた。みんなから「いいお姉ちゃん」だと思われても、まあ、仕方ない。

軽い力で背中を押していると、ふいにうみかが言った。

「この間ね」

「うん」

「文集の原稿の、将来の夢のところに『宇宙飛行士』って書いたよ」

「そっか」

知っていた。

五年の男子たちが、「すっげえ、ザ・夢って感じ！」と騒いでいた。パイロットとか、宇宙飛行士とか、大きくて叶わないものの代名詞のように言われる「夢」。だけど、⑦言いたい人には言わせておけばいい。

私は、自分は何にどう見られるかが相変わらず気になるにもかかわらず、うみかになら、そう言い放ってしまった。

「私、宇宙へ行く人っていうのは、あんたみたいな子だと思ふよ。物の見方や、宇宙への考え方が私と全然違う」
深呼吸する。そして、ようやく「ごめんね」と謝った。

「怪我した日、私、鉄棒の練習付き合うつて言ったのに、行かなかった。約束、破ってごめん。私がきちんと行ったら、うみかは怪我しないで済んだかもしれない」

「別にお姉ちゃんのせいじゃないよ。お姉ちゃんがいてもいなくても、私は鉄棒から落ちただろうし」

「それでもごめん」

「いいってば」

普段どんな時でもけろりとしているうみが、珍しく居心地悪そうに顔をしかめる。しばらく無言でストレッチを続けていると、やがて、うみが思いがけないことを言った。

「⑧私は、お姉ちゃんみたいな人が宇宙に行けばいいと思う」

「は？」

ふざけてるのかと思つて顔を覗きこんだけど、うみかに限つてそれはなさそうだった。

「〃はるか〃つて名前、宇宙飛行士に向いてる」

「名前？」

「宇宙のことを〃はるか彼方〃つて表現している本がたくさんあって、私、それを見るたびに、昔からずっと羨ましかった。

お姉ちゃんの名前、いいよ」

驚いてしまう。私はずっと「うみか」の名前が羨ましかったけど、うみかもそんなふうに思つてたなんて。

名前を面と向かつて「いいよ」なんて褒められたら、照れてしまった。どんな顔をしていいかわからない私の前で、うみかが

「それと」とさらに続ける。

「私、言葉にして何か言うの、苦手なんだ」

真面目な顔のままで言う。

「色を見ても、自然を見ても、仕組みを理解するのが楽しいし、いいなって思うけど、それだけなんだ。前に、お姉ちゃんと海に行った時、お姉ちゃん、私に夜が暖かいって言ったの、覚えてる？」

そう感じたことは確かに覚えているけど、口に出したかどうかはわからない。どちらにしろ、些細なことだ。黙ってしまった私に、うみかが言う。

「私、夜を怖いと思ったこと、ないから。お姉ちゃんが、暗いけど怖くない、夜の色の空が地球を包んでる本当の空だつて言

った時、衝撃だった。そうか、夜が怖い人が見る空ってそういうものなんだって、びっくりしたの」

うみかが私を振り返^{かえ}って、少し笑った。前の方で先生のホイッスルの合図が鳴って、今度は私が背中を押される番になる。

「あと、その時に、月を黄色じゃなくて、白に近い金色って言った。——私、月は好きだけど、月は月の色で、黄色でも金でも、うまく表現できない。宇宙から地球を見ても、どんなふうに言えばいいか、きつとわからない。ガガーリンみたいに、きつとあれからずうっと時間が経^たっているのに、同じように『青かった』しか言えないと思う」

「そうなの？」

「うん」

少しおかしくなって笑うと、うみかが「だから、お姉ちゃんみたいな人を宇宙につれてくのが、私の夢」と答えた。

「画家の人をつれてって、地球を実際に自分の目で見て絵を描いてもらったり、青も、ただ青じゃなくて、どんな青なのか、言葉で語ってくれる人たちをつれていきたい。何十年かかるか、わかんないけど」

「つれてってよ」

私は言った。

「私が死ぬ前に、そういう時代にしてよ」

「でも、正直、お姉ちゃんに合わないかも」

「何だと」

真剣^{しんけん}に腕組^{うでぐ}みして考えるうみかの物言いが本当にこの子らしい。「そういえば」と、せっかくだから私も尋ねてみる気になった。

「海に行った時、貝殻の音のことも話したよね。私が海の音だって言ったら、あんたが違^{ちが}うって言って、それで怒^{おこ}っちゃったけど、あの時、本当はなんか言おうとした？ 『その音は』って言いかけて、やめた」

「ああ——」

うみかが長く息を吸^すい込んだ。どうやら覚えていらしい。唇をきゅつと結ぶ。うみかが小声になって、答えた。

「『その音は、お姉ちゃん自身が奏^{かな}でてる音だよ』って言おうとしたの」

私は咄^と嗟^そに妹を振り返った。⑨私の背中を一生懸命押してる頭が見える。髪は病院で切った時よりも少し伸びてきた。すごくいい、と思った。思わず言った。

「うみか、きちんと言葉にできてるよ。奏でてるなんて言い方、私もできないよ」
「そうかな」

ピー、とまたホイッスルが鳴って、ストレッチが終わる。立ち上がった私たちはお互いの顔を眺めた。

集合の合図がかかって、先生のもとに走り出すとき、うみかが私の腕をすつと掴んだ。柔らかい手の感触と体温を感じた途端、無性に、⑩この子は私の妹だ、と思った。考え方が似てなくても、姉より頭がいいかもしれないけれども、無条件で私の腕を頼っているのは、この地球上で、この子だけだ。

キーン、と頭上で高い音がして、振り仰ぐと空に飛行機が飛んでいた。白い飛行機雲が線を残している。

一九九二年の秋空がこんなふうに高かったことを、覚えていようと思った。

語注

※1 「毛利衛さん」——日本人初の宇宙飛行士に選拔され、スペースシャトルに二度搭乗した。

※2 「ピアノカ」——鍵盤ハーモニカ。

問一 二重傍線部①「迂闊に」(10行目)、②「肝心なこと」(63行目)、③「咄嗟に」(67行目)の本文中における意味として最も適当なものをそれぞれア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

①「迂闊に」

ア. どうどうと

②「肝心なこと」

ア. 詳しいこと

イ. とうとつに

イ. 重要なこと

ウ. ずうずうしく

ウ. 本当のこと

エ. ついうっかり

エ. 大ざっぱなこと

© 「咄嗟に」

ア. こっそりと

イ. じろじろと

ウ. 改めて

エ. 反射的に

問二

本文10行目に傍線部①「少し迷ってから、ようやく『いいね』と話しかけた」とありますが、このときの「はるか」の気持ちはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. 近寄ってきた「うみか」が無言でいることに気まずさを感じているが、沈黙ちんもくの時間に耐えられなくなり、「うみか」の好きな宇宙の話題を振って会話を弾はませたいという気持ち。

イ. 個性的でかわいい名前をもつ「うみか」にうらやましさを感じていたが、暗い夜の海と「うみか」がよく似合っているということを手伝いに伝えたくて、ふさわしい言葉を選びたいという気持ち。

ウ. 宇宙のことをよく知っている「うみか」に対して夜空の話をすることに気おくれを感じていたが、旅先の浜辺という非日常的な状況じょうきょうきょうのなかで自分が思ったことを、「うみか」に伝えてみようという気持ち。

エ. 遮るもののない視界いっぱい的大海と空を前に自分のちっぽけさを感じていたが、となりに家族である「うみか」がいることで孤独感こどくかんがやわらぎ、感謝の言葉を伝えてみようという気持ち。

問三

本文45行目に傍線部②「受け取る気がしなかった」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア・「うみか」は少しも笑顔を浮かべておらず、貝殻の音に感動していた自分があまりに子どもっぽく感じられて、発言を取り消したと思うほど恥ずかしく思われたから。

イ・貝殻の音に感動した気持ちを「うみか」にわかってもらおうと貝殻を渡したのに、現実的な説明をされて共感を得られず、いつものように苛^{いら}立たしく思われたから。

ウ・自分が怒っている理由をまったく理解しないまま必死に追いかけてくる「うみか」に対して失望し、そんな「うみか」の幼さが急にうっとうしく思われたから。

エ・貝殻にロマンティックな魅力^{みりよく}を感じていた自分の気持ちが「うみか」によって台無しにされたことで、もはや貝殻としての価値を見失ってしまい、つまらなく思われたから。

問四

本文92行目に傍線部③「この時も私の目を見ようとしなかった」とありますが、この態度から「はるか」は「うみか」のどのような様子を読み取っていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで記号で答えなさい。

ア・骨折によって宇宙飛行士になれなくなることも、髪を切られてしまったことも、「うみか」にとつてはもう仕方ないことだとあきらめて自分で納得しているので、今さら姉に慰^{なぐさ}めてもらいたくないと反発する様子。

イ・骨折の手術で宇宙飛行士になれなくなるかもしれないショックや、お母さんに病院でばつさり髪を切られた苦しみなど、「うみか」の本当の気持ちは理解されておらず、この状態では姉にひどいことを言ってしまうような様子。

ウ・骨折の手術によって宇宙に行けなくなるかもしれないことも、髪を切られてしまったことも、「うみか」にとつてはつらい出来事であるが、無理矢理^{むりやうり}に平気なそぶりをして、本心を気取られないようにしている様子。

エ・骨折のケガの痛みや宇宙に行けなくなるかもしれないという不安な気持ちはあるものの、病院でお母さんに髪をばつさり^いと切られたことの違和感^{わかん}でなんとなく落ち着かず、恥ずかしがっている様子。

問五

本文115行目に傍線部④「闇が、この時も少しも怖くなかった」とありますが、「はるか」は夜空や宇宙をどのように感じていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア・ 去年旅先で見た夜空は、地球を包む本当の空の色だと思われ、また家族と共にいたことで温かく感じられた。「うみか」の夢を応援したくなっている今、宇宙は「うみか」が目指している特別な場所で、自分も身近に感じている。

イ・ 去年旅先で見た夜空は、宇宙なのだと強烈に感じられ、それを家族で共にみた興奮で怖くは感じなかった。「うみか」の夢に共感している今、宇宙は宇宙飛行士となって「うみか」と一緒に目指すべき場所だと感じている。

ウ・ 去年旅先で見た夜空は、夕日がだんだん藍色の空になって、宇宙の色なのだとはつきり感じられた。「うみか」の夢をよく理解し自らも宇宙について学んだ今、地球から宇宙までの距離がとても近いと感じている。

エ・ 去年旅先で見た夜空は、遮るものもなくきれいな空の色で、宇宙なのだと感じられた。「うみか」の夢を知り自分も宇宙について興味を持った今、宇宙は誰もがあこがれるような美しい場所なのだと感じている。

問六

本文128行目に傍線部⑤「わかったよ、うみか」とありますが、「はるか」は何を理解したのですか。説明しなさい。

問七

本文176行目に傍線部⑥「でも、私は、これをうみかに読んで欲しい」とありますが、「はるか」がこのような気持ちになっただけではなぜですか。説明しなさい。

問八

本文 203 行目に傍線部⑦「言いたい人には言わせておけばいい」とありますが、このときの「はるか」の気持ちの説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. 「うみか」はものの見方や宇宙への考え方が周囲とは明らかに違って大人びているので、誰にどう言われても「うみか」のような人間にこそ、宇宙飛行士になってもらいたいという気持ち。

イ. 「うみか」にとって宇宙飛行士は、本気で目指している目標であることを知っているので、同級生からのからかいにもとりあわず、これまで通り周りを気にせず本気で追いかけてほしいという気持ち。

ウ. 「うみか」はようやくみんなの前で将来の夢が宇宙飛行士であると発表できたので、同級生たちが理解のない言動をしてもとりあう必要は無く、しっかりと彼らを見返してほしいという気持ち。

エ. 「うみか」にとって宇宙飛行士は小さい頃から本気で夢見ていた目標であり、そんな彼女の気持ちを踏みにじるような言葉をかけてくる同級生の男子たちが、人として信じられないと思う気持ち。

問九

本文214行目に傍線部⑧「私は、お姉ちゃんみたいな人が宇宙に行けばいいと思う」とありますが、このときの「うみか」の気持ちの説明として最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. 自分の将来の夢が「宇宙飛行士」であることを姉はすでに知っていて、黙って見守ってくれていたことに感謝しているが、鉄棒の事故で骨折したことで、姉が自分自身を許せず責め続けていることに気づき、姉に日ごろの思いを伝えることによって、慰め、励ましたいと思っている。

イ. 文集の原稿の将来の夢のところに「宇宙飛行士」と書いたことを初めて姉に打ち明けたが、「物の見方や、宇宙への考え方」が全然違うということを根拠に「宇宙に行くのはあんたみたいな子だと思う」と言われたことで、真剣にとりあってもらえていないように思われ、残念で、意地になっている。

ウ. 自分が鉄棒だけがをしたことは姉が来なかったからではないとすでに伝えているのに、姉がただひたすら「宇宙へ行く人っていうのはあんたみたいな子」と言って機嫌をとり重ねて謝罪をしてきたことで、今後もまだまだ気を遣われるのかと、腹立たしく、いらだっている。

エ. 姉は宇宙を思い起こさせる「はるか」を名前として持っており、また見たり感じたりしたことを言葉でうまく表現できるので、宇宙の姿や宇宙から地球を見たときの様子も言い表すことができそうだと、自分にはないものを持つ姉に素直にあこがれ、うらやましく思っている。

問十

本文 253 行目に傍線部⑨に「私の背中を一生懸命押している頭が見える」とありますが、ここからペアでストレッチをしている様子のほかに、「うみか」のどんな気持ちを読み取れますか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 海辺の場面で言えなかった言葉を伝えたものの、素直になることが少し照れくさい気持ち。
- イ. 「奏でてる」などと日頃の自分では使わないようなセリフを言い、いたたまれない気持ち。
- ウ. 姉自身が奏でている音かどうかわからないのに言い切ってしまう、後悔している気持ち。
- エ. 貝殻から聞こえる音が姉自身の音だなんて我ながらうまく表現できて、得意な気持ち。

問十一

本文 259 行目に傍線部⑩「この子は私の妹だ」とありますが、これは「はるか」のどのような気持ちを表していますか。本文全体に見られる「うみか」に対する気持ちの変化もふまえて説明しなさい。

【一】

問一

問二

X

Y

問三

問六

i

ii

iii

iv

問七

【二】

問八

α

β

問九

問一

$\hat{1}$

$\hat{2}$

$\hat{3}$

$\hat{4}$

$\hat{5}$

【三】

問二

$\hat{1}$

$\hat{2}$

$\hat{3}$

$\hat{4}$

$\hat{5}$

問一

Ⓐ

Ⓑ

Ⓒ

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

※評 点

受験番号

氏 名